

休みの間に、最近受診された方のカルテを点検して、放射性セシウムのアレルギーについてまとめてみました。

総数 745 名(女 480 名、男 265 名)、そのうち放射性セシウムのアレルギーがあるか、又はあった方は、女 50.4%、男 48.5%で、性別には余り関係は無いようですが、昨年 8 月に、アトピーの原因としての放射性セシウムを調べた時は、3 割程度でしたので、明らかに増加しているように思います。

年齢別では、0~2 歳で 41.7%、3~6 歳で 55.7%、7~17 歳で 50.0%、18~34 歳で 52.7%、35~59 歳で 55.6%、60 歳以上で 43.4%と、乳児と高齢者でやや少なく、幼児と働き盛りがやや高い傾向でした。しかし、ミルクや母乳が大半の 0~2 歳の 41.7%は、むしろ驚くべき高さと言えるのではないのでしょうか。免疫力や消化力の未熟な乳幼児は、特にしっかり放射性物質から守られる必要があると思います。

次に、放射性セシウムのアレルギー症状は、どのように現れているのかを調べてみました。

最も多いのは、皮膚症状です。湿疹、蕁麻疹様、汗疹様などいろいろな形で出てきますが、痒みが特に強い傾向があり、約 60%の方に見られます。8~9 月という汗の多い季節が影響しているのかも知れません。次いで、鼻汁、鼻血、鼻づまり、咳、痰などの呼吸器症状が意外に多く、他の吸入性抗原と共に、病因となっているのかも知れません。鼻 26.5%、扁桃 20.9%、気管 18.0%、肺 14.7%に見られました。

また、筋肉も 22.8%と多く、特に、下肢、上腕、背部の筋肉に多く見られました。中には、だるくて学校に行けないとか、座るのも苦痛で、寝転がって本やテレビを見ているという方もいます。被爆医療で有名な「ブラブラ病」はこんな様子だったのではないかと思うような状態でした。

消化器では、胃 12.6%、小腸 9.1%、大腸 13.1%、食道 4.8%でした。腹痛や下痢、嘔気、嘔吐などの症状が出現しますが、他のアレルゲンと違って、“のどがつまる”という訴えをする方が多いと思います。汚染度の高そうなものを食べてもすぐ下痢をして出してしまうという方の被害は、下痢以外には無く、このような方は腸内環境が大変優れているのではないかと思います。自分に合う繊維の多いものを食べ、食生活を改善し、腸内善玉菌を取り入れ、腸内環境を良好にしておく事も、放射能汚染時代を生きていくために大切なことです。

他に、10%前後ですが、前頭葉、三叉神経、自律神経、眼に異常の見られる方があり、頭痛や集中力低下、イライラ、脱力感などがあります。7%と少ないですが、他に関節、肝、心臓、耳、口腔粘膜、歯肉、膀胱、膝、卵巣、脊椎等の症状の方もあり、数は少ないですが、症状は厳しい為、適確に原因をつきとめ、それらを取り除く必要があります。

除染は、今までもお伝えしているとおり、前処理として、ハウレンソウをゆでるように塩ゆですることです。とても有効で、約 2 週~1 か月で反応が消えます。その後は、生で食べるものを少々は取り入れ可能となります。治りにくい方や再発をくりかえす方は、汚染の強いものを知らずに食べ続けている可能性があります。

昨今の世情を見聞きするにつけ、被災地の人々の暮らしを守り支援するという事は、汚染の実態や被害を曖昧にしたり、隠したりすることではなく、もっと実態を明確にすることの上になり立つのではないかと思います。診療の場から、未曾有の原発過酷事故の長期に亘る健康被害とその影響を軽減させる方法について探っていきたいと思います。